

## 歴史を読み解く：さまざまな史料と視角

服部, 英雄  
九州大学大学院比較社会文化研究院：教授：日本史

<https://hdl.handle.net/2324/17117>

---

出版情報：歴史を読み解く：さまざまなものと視角, 2003-11. 青史出版  
バージョン：  
権利関係：



# 1 文永十一年・冬の嵐

## 一 冬の嵐とは何か——気象・地形・遺跡から復原される文永の役

文永の役。蒙古襲来、前半の戦いである。通説によると、長期の準備を経て日本に到達した蒙古（モンゴル、元）・高麗連合軍四万は、わずか一日の戦闘で本国に引き返した。考えてみれば、なぞめいた不可解な事件である。不自然な事件ともいえる。かつてはきわめて明解な解釈がそれを説明していた。すなわち「神風」である。暴風雨が瞬時に蒙古軍を殲滅したというのである。終戦まで、そして戦後も不動の定説だったが、しかし根本的な疑問を提出した人物がいた。福岡管区気象台に勤務した荒川秀俊である。

元・高麗軍は文永十一年十月二十日（ないしはそれ以前に）博多湾岸に上陸し、この日に合戦した。この二十日という日付は『竹崎季長絵詞』ほか複数の史料にみえて、確実である。西暦・グレゴリウス暦では一二七四年十一月二十六日となる（当時はユリウス暦であったが現代暦に換算）。この季節に台風はこない。遠洋航海に耐えうる大型船が沈むとすれば、台風以外には考えられない。神風は吹かず、遠征軍は自主的に退去していく。これが昭和三十三年（一九五八）に発表された荒川主張の骨子である。<sup>(1)</sup>

台風は晚秋・初冬にも発生するが、十一月になると太平洋上で右に大きく旋回する。参考までに荒川説以後のデータをみよう。福岡管区気象台『梅雨と台風』あるいは旧建設省ホームページ掲載「台風の

「発生数および上陸回数」をみると、平成二年（一九九〇）十一月三十日に和歌山県白浜町に上陸した記録があるものの、九州では昭和六十三年（一九八八）十月十七日鹿児島県枕崎市に上陸した日がもつとも遅い。昭和二十一年（一九四六）から平成六年（一九九四）までの間で全上陸回数一五七回のうち十一月は二回で十二月はゼロである。統計的にいえば十一月末の台風が九州北部に上陸する可能性はない。

気象からみれば荒川説は首肯される。

しかしながら荒川の見解は『勘仲記』の「逆風」記載、『高麗史節要』の「大風雨」記載を根拠とする当時の歴史学者たちによつて、ほとんど支持されなかつた。それでも荒川説の影響は大きかつた。博多湾内ではなく、自主的撤退のさなかに海上で嵐にあつたとみる見解を支持する研究者は次第に増えていつたようである。自主的な撤退説の側では、モンゴルが外国を侵略する際の常套とした、手始めの威力的な偵察行為と見る人もいる。<sup>(2)</sup>

嵐について記す史料は三点あると思われる。『高麗史節要』は一四五二年（文宗二年、朝鮮）の編纂で、事件よりは一八〇年も後のものになるが、唯一の朝鮮側史料である。そこには「会夜大風雨」と記述されている。「夜、大風雨に会う」と読むか、あるいは「たまたま夜に大風雨」と読むかのいずれかであろう。昼の戦闘（日付の記載を欠くが十月二十日）を綴つたあとこの文は、やはりその日の夜に嵐が襲つたと読むべきものと考えられやすい。（この点は一八頁に後述する）。

嵐について記す第二の史料は建治元年（一二七五）十二月三日官宣旨案（薩藩旧記雜錄・国分寺文書、『鎌倉遺文』一六卷一二一六三）である。

蒙古凶賊等來著于鎮西、雖令致合戰、神風荒吹、異賊失命、棄船或沈海底、或寄以浦

神風の初見史料で、文永の役翌年のものになる。いささか早すぎる感もあるし、編纂物中の史料だが、薩摩天満宮・国分寺のような宗教関係者から神風思想が主張されることはあり得なくはない。やはり嵐は吹いて、文永の役を決定づけたのである。

第三の史料は同時代史料である『勘仲記』の「逆風」記載であるが、これについては後述したい。

これらの記事によつて、嵐が吹かなかつたとする荒川説にも、検討の余地のあることがわかる。ところで台風シーズン以外に嵐はないのだろうか。もちろんそうではない。嵐は吹く。発達した低気圧や寒冷前線の通過にともなう空風がそれで、台風並みの風が吹く。晚秋、初冬に風雨・波浪警報がされることはずほど珍しくはない。十一月の末ならば、寒冷前線通過にともなう嵐がまず考えられるところだろう。もしこの考えが正しければ、「文永の役」像はかなり変わつてくる。まず前線通過のあとは冬型の気圧配置になつて、北西の風が吹く。当時の航海技術では風上に向かつて帆船が進むことはできなかつた。冬型の気候配置がゆるむまでは、北西の方向つまり博多から壱岐や対馬、そして朝鮮に向けて出発することは不可能である。翌朝ただちに壱岐に出発することなど、ありえない。

この嵐は冬将軍の到来を告げるものもある。以後、冬型気圧配置は強まる一方だつた。蒙古・高麗軍にとって日本に留まることは、春三月（西暦）に東風が吹くまでは故国に帰れなくなるであろうことを意味していた。

さて表1は文永の役に關わる主な史料を一覧にしてみたものである。これらをもとに事件を復原することになるが、文永の役に関する史料は限られたものしかないことがわかる。リアルタイムで書かれた

関東評定伝	帝王編年記	国分寺文書(建治元)	有浦文書(弘安二)
十月五日 対馬にて少弐代富士馬充敗死	(10/17京)三日  (10/28) 飛脚壱岐島被打取 (下記参照)		
十月二十四日 大宰府にて合戦、異賊敗北	(下記参照)  (下記参照)  (11/6) 飛脚、去月二十日合戦して一艘抑留ほか追い返す 十一月二十四日陣定	神風荒吹、異賊失命、棄船或沈海底、或寄以浦  佐志一族戦死(場所日時不明)	鎌倉遺文16-12163  鎌倉遺文18-13731

\*『吉続記』については本文参照。

史料となると、『勘仲記』の簡単な記事のみで、他は数年後の散発的な文書史料が二、三点である。比較的叙述量の豊かな史料は數十年後に書かれた記録、絵巻である。しかし従来の研究はこれらの史料のもつ特質を吟味することなく、事件を論じてきた。そこに大きな問題がある。本章はその点の再確認を行うものであるが、考察に先立ち、合戦の概要を文献以外の諸要素(遺跡・地形・気象)も勘案しつつ、素描しよう。

表1 文永の役に関する史料

	高麗史節要	季長絵詞	八幡愚童訓	勘仲記
対馬攻略			十月五日	(10/22)十三日の少弐代官合戦(博多の情報)
壱岐攻略	十一日		十月十四日	
十月二十日 の合戦	○日にちを欠く ○場所の記事なし	十月二十日赤坂・鳥飼浜	十一(ママ)月二十日 赤坂松原に蒙古陣、下りに逃げる 一人モ無逗者、水木城へ退却 炎上、神体は宇美上山極楽寺へ ○翌朝、鹿島に一艘捕獲 ×前夜雨、神官の衣類が濡れる	
大宰府合戦		鳥居前通過		(下欄参照)
箱崎				
姿消える				
暴風	会夜大風雨			(11/6)去頃、海上の数万艘、逆風吹来りて、本国に吹き帰す (11/14)炎上により廃朝
廃朝				
備考	○は記事の所在を示す ×は関連記事			

## 史跡元寇防墾から

蒙古軍がどこに上陸し、どの方面から攻めてきたのかについては諸説があるが、明確な史料はない。文永の役終了直後に築造が開始された石築地は、彼らが上陸した場所、そして上陸する可能性がある場所に築かれた。石築地はいま博多湾岸に多数残つており、良好に残存するものは史跡元寇防墾として保存されている。史跡指定地以外にも博多では旧奈良屋小学校から、百道では西南学院大学構内から、発掘調査によつて防墾(石築地)が検出されている。

この石築地を観察すれば当時の戦法、ならびに蒙古軍が文永の役にとつた行動が推察できる。石築地はすべて砂浜・長浜にあつて、磯には築かれていない。遠洋航海をしてきた大型船は直接、接岸できないので、小型の上陸船（はしけ）で着岸・上陸した。蒙古兵は一挙に大軍が上陸しなければならない。一隻ずつ順番に上陸するわけにはいかなかつた。適所は大量な人員の上陸が可能な広い浜だけだつた。もともと船は岩礁地帯（磯）に接岸することはない。また磯では人間は行動できるが、馬の行動は制約される。蒙古軍に騎馬隊が含まれることは、「竹崎季長絵詞」が描く蒙古軍団のなかに、騎馬の蒙古兵がいることから明らかである（図1参照）。騎馬軍団たる蒙古軍が磯に着岸するはずはなかつた。

さて鎌倉幕府は博多湾内の南岸については、ほとんどすべての長浜に石築地を作つた。博多湾外、玄界灘の外洋に面しては、唯一、今津長浜にこれを築いた。対馬壱岐方面から博多を攻撃する場合、まず北西の浜に来着する<sup>(5)</sup>。

文永の役にも蒙古軍はこうしたところに上陸したか、しようとした。二度目の来襲を警戒した幕府はその強敵を海辺で防ごうとした。防墨に依拠しての水際作戦である。なぜこうした戦法をとつたのか。およそ二メートルもある石築地の高さは馬の上陸を阻む。何よりも馬を上陸させないことを、主目的があつたと考える。蒙古は騎馬民族で、乗馬戦をもつとも得意とした。馬はたとえるならば重戦車などの威力を持つた。騎馬武者と徒步の侍が対決した場合、かならず馬のない側が敗れる。突進する馬に對し人は逃げるのである。

事例は無数にあるだろう。馬を操れなかつたインカ帝国正規軍はわずかなスペイン人の騎馬隊に敗れたといわれる。鎌倉武士もなにより馬を重視していた。鉢の木物語の佐野常世だけではない。南北朝の

内乱に、武蔵武士、山内経之は合戦に馬を失い、「鞍具足を送れ、鞍がなければ徒步にて馬をつれてきてほしい」と切実に訴えた。だが馬はこず、あえなく戦死した。馬を失えば敗戦であり命も失うのである（暦応二年十月十六日書状・高幡不動・不動明王胎内文書、『日野市史史料集』）。

馬さえ上陸させなければ、いかに蒙古兵といえどもくみしやすい。外国からの騎馬隊には水際作戦がなにより有効だった。石築地はまさしく万里の長城と同じ発想から作られた。馬が越えることができない石の壁を作り、そこを守ればよかつたのである。漢民族が遊牧民族の馬を領土内に入れさせまいとしたように、鎌倉幕府も馬だけは入れさせまいとした。逆にいえば、文永の役では蒙古軍はたやすく浜から上陸し、鎮西御家人は蹂躪されたのだった。騎馬の蒙古兵に日本の騎馬武者は多くが立ち向かえず、かなりの被害を出した。幕府が延々と石築地を築かなければならなかつたことから、文字に記されなかつた事実を逆に読みとることができること。

なお防備は浜だけでは不十分だった。河口から干潟への侵入があつた。

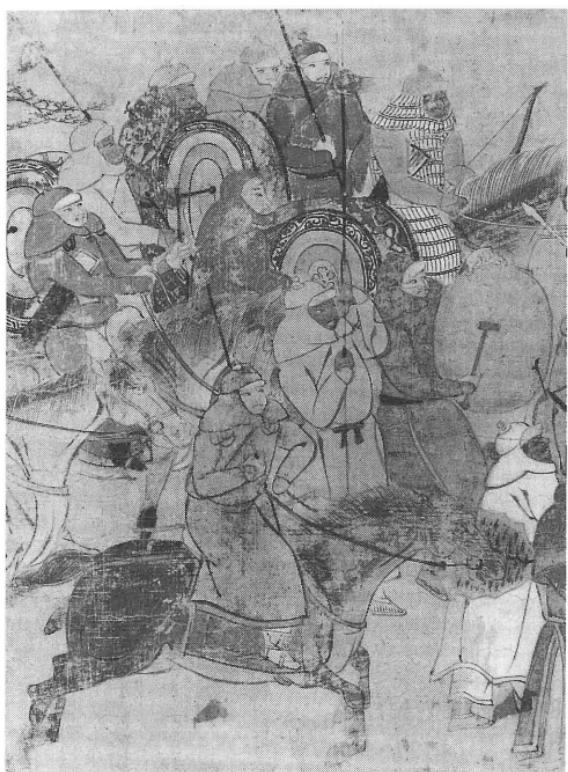


図1 蒙古軍は多数の馬とともに攻めてきた  
(『蒙古襲来絵詞』、宮内庁三の丸尚蔵館蔵)

7 一 冬の嵐とは何か



(『蒙古襲来繪詞』、宮内庁三の丸尚蔵館蔵)

河口には石築地は築けない。弘安の役後の弘安十年（一二八七）、筑前国御家人中村氏に対して多々良瀬に乱杭六本を用意せよとの指令がでている（中村文書、『鎌倉遺文』二一巻一六二三四）。多々良川は箱崎東部で博多湾に注ぐ川である。蒙古兵は浜にあがれなくとも、博多湾から河川に入り、干潟つまり陸地の奥から侵入できる。それを防ぐには通路となる瀧（千潮時にも河川である部分、瀧以外は干潮時に座礁するので通れない）に乱杭を設置する必要があつた。中村は小さな御家人であつたから六本ですんだが、各地頭御家人は数十本から百本の乱杭を用意した。臨戦下には乱杭が林立し、河口からの侵入を阻止した。

### 赤坂山、鳥飼浜と龜原山

渡海作戦ではまず海岸堡構築が常道である。たやすくは落とされない強固な陣地を敵国に築くのである。遠征軍は赤坂山占領を目標とし、その前面に陣を置いた。赤坂山はかつて古代の迎賓館・鴻臚館がおかれ、のちには黒田如水・長政親子によつて福岡城が築かれた。推定標高約三五メートル、博多に近



図2 文永の役ののち石築地が浜に築かれる。馬防であった。

接する随一の要害地である。心臓部ともいえる。福岡城築城までは警固社旧地であり、別当坊もあつただろうから、建物・井戸は完備していた。日本側は蒙古の作戦は予想できたから、あらかじめここに陣を構えて備えていた。城・要害を構えていたといつてもいいだろう。『竹崎季長絵詞』に「いそくあかさかにちんをとる」「たけふさに、けうと、あかさかのちんをかけおとされて」とある。この赤坂陣は凶徒、蒙古側の陣と解釈される。これは赤坂山ではなく赤坂松原に置かれた攻撃用の陣、つまり向陣であろう。蒙古が赤坂山を掌握していたのなら、たやすく奪還されたりはしまい。蒙古側の赤坂陣と、日本側の赤坂山要害が対峙する状況だつた。

『高麗史節要』によれば渡海船は九〇〇艘、兵士は漢蒙軍二万五〇〇〇、我軍（高麗軍）八〇〇〇だった。ほか水手らが六七〇〇人いた。平均すれば一艘には兵士三六人程度と船員七、八人が乗っていた。馬は兵三人に一頭として一二頭乗つていた。上陸用

小艇を仮に三隻積んでいたとして、一隻六人馬二頭とすれば一度に一艘から二〇人近くの兵士が上陸できる。蒙古軍としてはできる限り多くの艦船を浜に近寄せたかつただろう。

『竹崎季長絵詞』に「あかさかはむまのあしたちわろく（馬の足立悪く）候」とあるのは、鳥飼浜（千潟）、今日の大濠公園（福岡城の西の外濠）の前身に当たる干潟を指すと考えられる。赤坂山西の千潟に該当し、『筑前国続風土記』によれば、草ヶ江ともよばれた入海だつた。

当時の地形は今日とは相當に異なつていた。図3は福岡市二五〇〇分一図（平成元年測量）記載の各地点標高により作成した等高線で、微地形を示したものである。今日の樋井川流路は不自然に海岸砂丘（鳥飼砂丘、標高六メートル）を断ち割つており、人工水路であることは明らかである。近世初頭の樋井川は慶長十年（一六〇五）作成の「筑前国絵図」（福岡県史資料二・一九三三、図4参照）にみると、草ヶ江内湖を経由し、荒戸砂丘（標高二、一メートル）を突破して、直接博多浜（荒津浜）にていたと考えられる。<sup>〔推〕</sup>西には祖原山からつづく分水嶺、北には百道砂丘があつたから、東にしか流れることはできなかつた。寛文元年（一六六一）以前に作成された福岡城下図（図5）では洪水溢流が「土手切口」から大濠に流入している。一六〇五から六一年の間に土木工事が行われて、流路が付け替えられた。そこではじめて樋井川は「今川」とよばれた現在の河道を流れるようになつた。しかし異常降雨では元の流路に戻つた。中世には慶長国絵図のとおり、荒津山の東に河口があつたのだろう。

なお福岡城城下は二列からなる砂丘上に立地する。その外堀は大濠（大堀）から赤坂門に至り、さらに東に中堀、佐賀堀（肥前堀）を経て那珂川にまで到つていた。このうち佐賀堀は二つの砂丘間の低地を利用したものである。外堀の西部は樋井川干潟の一部であり、東部は那珂川干潟の一部、バックマード

シユであろう。中世以前に両者がつながっていたかどうかまではわからない。しかしこうした堀の原型となる干潟が存在した。<sup>(6)</sup>

『季長絵詞』に「とりかひのしほひかた」と書かれた河口の潮干潟は正保三年（一六四六）作成の「福博惣絵図」に「塩やき浜」と書かれた沼沢地にまでおよぶ広大なものだった。この「塩やき浜」は今でも残る樋井川の両側、標高一メートル台の低地が該当する（図3参照）。砂丘上の微高地に鳥飼の村が立地し、「鳥飼二郎船頭」（張英、年末詳箱崎宮造営目録・石清水八幡宮文書、「筥崎宮史料」所収、「鎌倉遺文」未収録）の存在からすると、この内面干潟に鳥飼津ともよぶべき津が存在したであろう。万葉集に多く歌われた「荒津」の港は古代以来の良港であつたが、樋井川河口がここに開いていたのなら、内海水面に直結していたことになる。一方祖原山の西は、室見川が自然流として百道浜砂丘低部を突破して河口を開いていた。

博多湾岸の津は多くが河口津で、今津、姪の浜、博多津、箱崎津など、地理的条件は酷似する。中世にはいくつもの川が合流し、一緒になつて砂丘を突破していた。後の時代に排水路を掘削して新川（分水）を作り、後背湿地を乾陸化させた。内湖（干潟）<sup>（軍兵）</sup>の水位は中世より低くなつたと考えられる。『季長絵詞』に「おきのはまにくんひやうあまた」とあるように、文永の役に博多息の浜から箱崎にかけて、少弐大友以下鎌倉幕府軍の主力がおかれた。元軍が博多周辺に上陸するのは、防備のもつとも堅い正面への突入になる。蒙古は手薄な後方を襲う作戦をとるが、目標の赤坂山を攻撃する必要があつたから、近接した荒津、長浜にも主力を上陸させた。

荒津周辺の長浜および旧樋井川河口は一斉の上陸に適していた。蒙古は海上にあつた数万の兵力を、

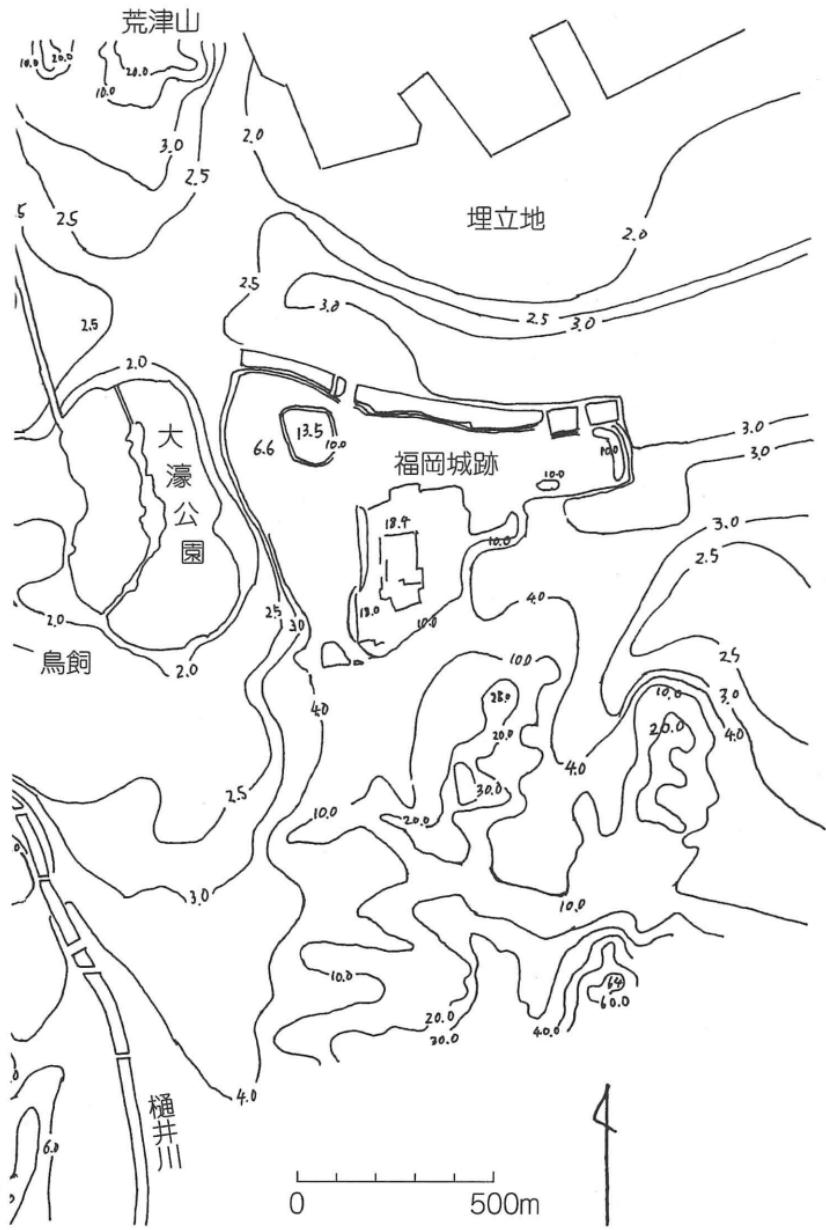




図3 福岡市・樋井川流域 微地形地図（12～13頁）

福岡市・2500分1地形図・平成元年測量（福岡市役所地下売店発売）に表記された各地点標高により作成。道路面は舗装厚だけ実際の地面高より高い。しかし微地形高低のおよその傾向は読みとりうる。

樋井川両岸には右岸（北）、鳥飼・埴安神社南方あるいは左岸（西）旧中浜町のように標高2メートル以下（1.8～1.9メートル）の土地がある。それより北に鳥飼地行砂丘（標高4～6メートル）を経て海に出る。掘割による人為的な水路で、今川という呼称もこのことに由来する。自然流としての樋井川は内湖干潟である草ヶ江（草香江、大濠公園の原形）に流入し（慶長国絵図、図4）、それよりは荒津山（西公園）南東、標高2.1メートルの砂丘低地より博多湾に流出したと考えられる。少雨期に砂丘内河口が閉塞されると、草が江潟湖は拡大した。黒門川、菰川はともに草ヶ江干潟陸化のための人工排水路である。

葉山（皿山）も併用したであろう。山にさえ上がれば下から撃つ弓矢は届かない。石も届かない。上にいれば弓矢の威力は倍増し、投石が可能だつた。引力を味方にできなければ、武器の多くが使えず、不利になる。山を争奪するのはこうした理由である。祖原山を占拠した百道浜上陸隊は陸路から赤坂山の南西に向かつた。

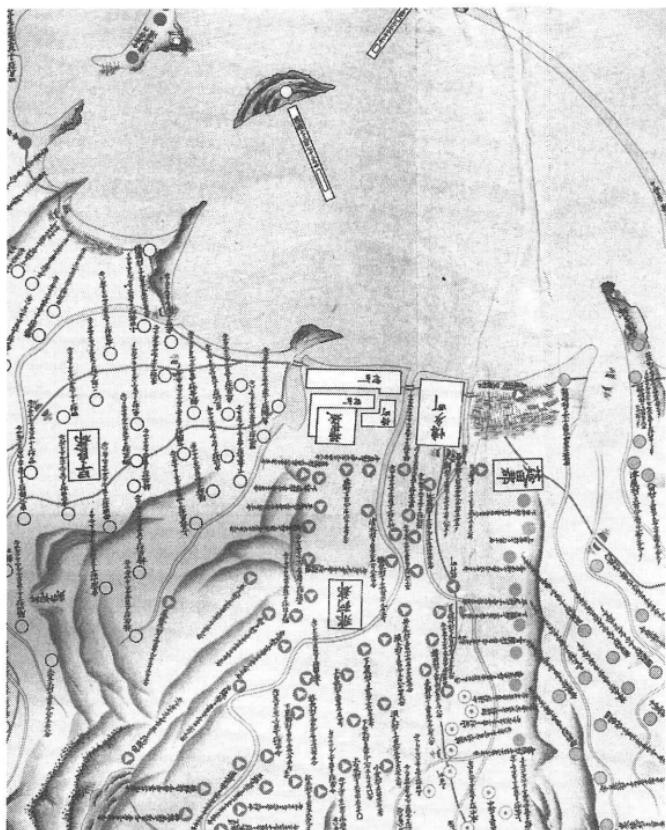
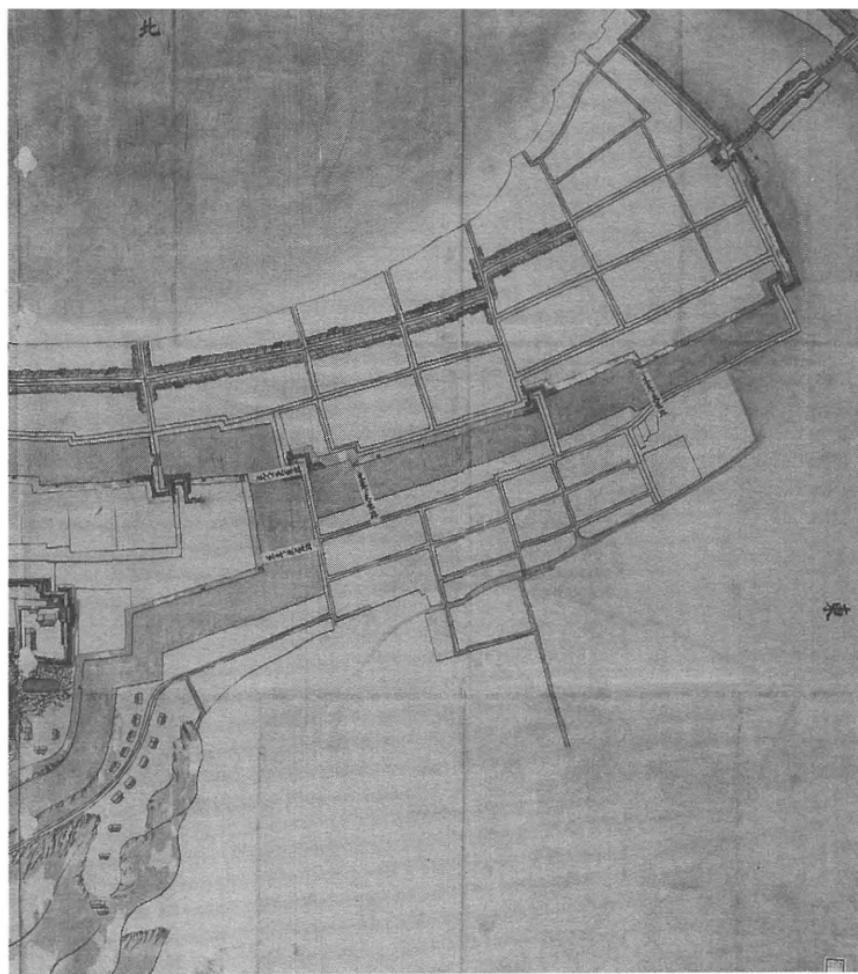


図4 慶長国絵図での樋井川流路  
荒津山（荒戸山）の東に河口がある。

瞬時に陸上に集結させなればならなかつた。松原に陣をかまえ、敵と対峙する間、さらには後方鳥飼干潟（草ヶ江）からも上陸作戦を展開した。また並行して室見川河口干潟と隣接する百道長浜からの上陸を行い、手近な麓原（祖原）山に陣を構えることには成功した。麓原山は標高三三・二メートル、赤坂山に比べれば、いくぶんこぶりで、博多にも遠くなつたが、結果的にここが本営となつた。隣接する紅



寛文元年（1661）に築かれた荒戸防波堤が書かれていないので、それ以前の作成と考えられる絵図、樋井川の土手切口がみえる。寛永十二年（1635）の台風の可能性が考えられる（本書145、159頁参照）。

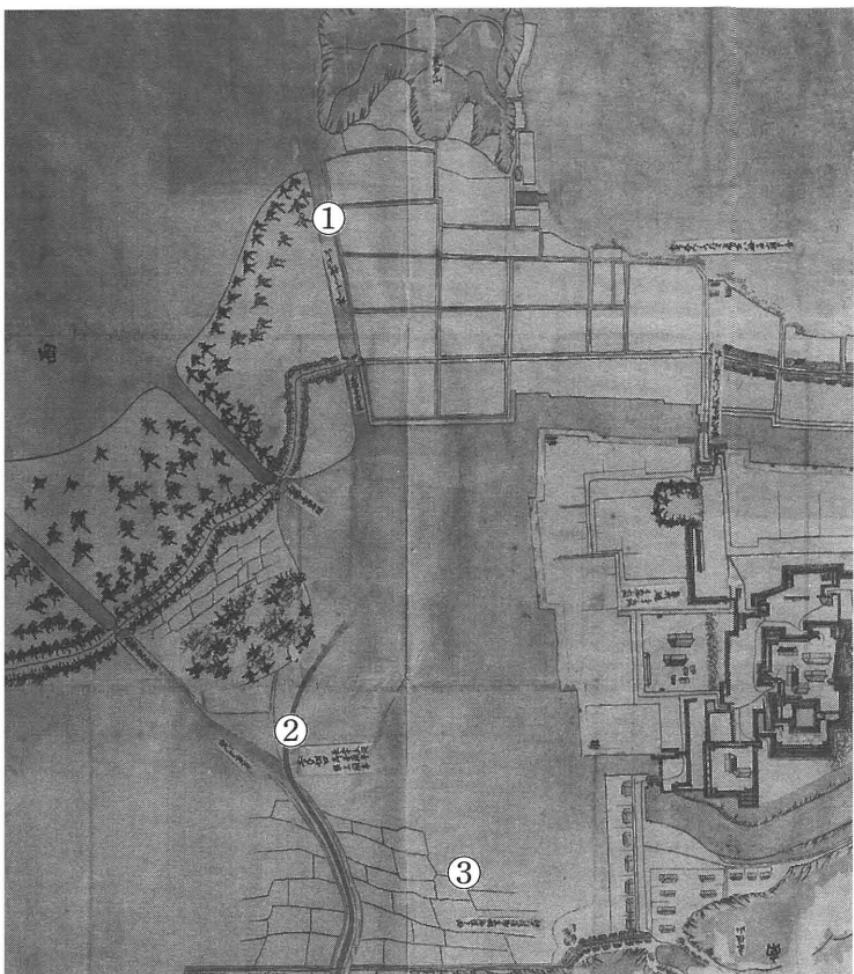


図5 福岡城下之絵図（九州大学九州文化史研究施設蔵）

①此うてみ埋申候 ②土手切口 ③江戸江被得御意相済埋申候由

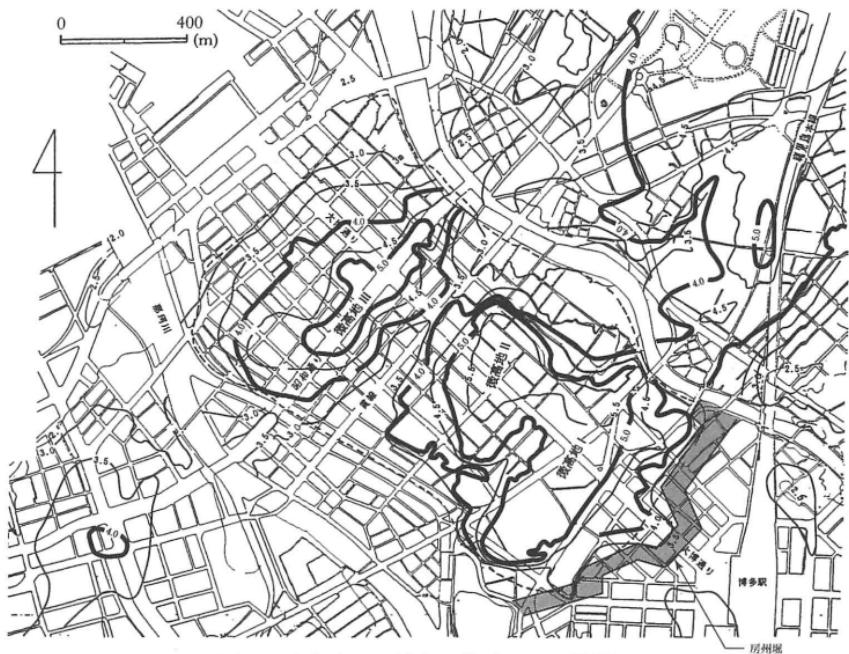


図6 参考地図 博多の微地形と旧房州堀

石堂川も標高4～5メートルの砂丘を掘り割っている。房州堀はこの砂丘後背低地を利用しつつ、潟湖の乾陸化をも目的に掘削された。

赤坂山を眼前にする荒津からの上陸作戦は、鳥飼干潟（草ヶ江）を後背にして陣をおくことになった。樋井川はさほどの大河ではないから、干潮時にはたやすく徒渉できた。しかし先に引用した『絵詞』にもあつたように（一〇頁）、干潟・沼沢地は敵・味方ともに馬の歩行に適さない。そのため日本側も多少苦戦はしたが、総体としては、この地形、地理は蒙古軍に不利に働くいた。陰曆では日にちと月のかたち（動き）、そして潮汐が連動している。（十月）二十日は月齢一九、中潮だった。したがってこの日の博多湾における満潮は正午一二時と深夜〇時前後、干潮は朝六時と夕六時前後である。現代のデータから推定される十一月中潮の干満差は一四〇～一六〇センチメートルである。けつして少ない干満差ではない。早朝、干潮時に干潟をわたり、

狭小地で赤坂山に對陣していた蒙古軍は、昼、満潮となつた樋井川河口（鳥飼干潟）に退路を失う。干潟は潮に満ちて、地理・地形に暗い遠征軍を苦戦に追いやつた。

『高麗史節要』によれば「左副元帥劉復亨」すなわち遠征元軍のうち、左軍の副司令官、ナンバー2である重要人物が流れ矢に当たつた。日本の矢は遠矢でも六〇メートル程度が有効射程距離である。その程度しか飛ばない。その距離の内側に日本軍は肉薄した。蒙古軍の陣形は乱れ、崩れた。重傷を負つた劉復亨は船に運ばれた。日本側には多大な犠牲者もでたが、それでも初戦は蒙古軍の事実上の敗北である。

遠征軍が考えた勝利の道筋は強固な海岸堡の構築、日本軍の速やかな降参・退散、そして占領地の植民地支配である。この目論見はもろくも崩れ去つた。日本軍の抵抗は強く、蒙古は赤坂山の占領に失敗したのである。残された選択肢は二つだけである。一つは春、東風が吹くまで日本で占領地獲得・確保・拡大をめざし、戦いつづける。もう一つは本格的な冬到来の前に玄界灘を乗り切つて本国に戻りつくことである。前者の選択は兵站（食料、兵具）の補給を欠くままに四ヶ月、戦いつづけることを意味し、裏返しとして四万兵士全滅の可能性を示唆していた。

『高麗史節要』に高麗三翼軍（左・中・右）のうち中軍の將、金方慶の発言が記録されている。かれは孟明が船を焼き、准陰が背水で戦つた故実を引きつつ、「請復決戦」、すなわち再度の戦いを主張した。

これは前者の選択肢である。しかし最高司令官である元都元帥忽敦は「小敵之堅、大敵之擒、策ニ疲兵ニ戰ニ大敵、非ニ完計也」、小さい敵でも守りが堅ければ、大きな敵の術中にはまる。疲れた兵をして大きな敵と戦うことはよい計略ではない、として撤退を決定した。後者の選択肢である。この発言は季

節風と航海技術の問題を背景に置けば、きわめて理解しやすい。冬には日本海の交通は遮断される。それまでに戦つたのは前線の兵（小敵、九州勢）で、うしろには大敵（鎌倉幕府、関東武士）もいる。長く日本にいれば、限りなく玉碎に近づいた。

## 二 『八幡愚童訓』は実録にあらず——中山平次郎らの原点に返れ

気象・地理・遺跡の状況からは上記のように想定できる。これは通説とはかなり異なっている。とにかく氣象に関する部分は通説とはかけ離れよう。なぜか。十月二十一日朝、蒙古軍は博多湾内から完全に姿を消していた。それがこれまで通説が描いてきたイメージだつたからである。これまでの研究史に、こうした場景を叙述しなかつたものはない。しかし文永の役について語る史料のなかで、そのことを記したもののは『八幡愚童訓』のみである。『勘仲記』にも一見類似する記述はあるけれど、まずは前者

## 『八幡愚童訓』から検討しよう。

『八幡愚童訓』は『群書類従』のほか『日本思想大系』寺社縁起（そのうち蒙古襲来記事は甲本）に収められているが、後者解説によれば文中「九十四代ノ朝廷」とあって、花園天皇治世中、すなわち延慶元年（一三〇八）～文保二年（一三一八）の作であり、文永の役からは三四年から四四年後の作品となる。同時代人からすれば、およそ一世代、後の作品となろう。書名は無知で愚かな童らに訓ずる、すなわち啓蒙し教育するとの意味と思われる。八幡信仰の宣伝・布教の必要上で作成されたものである。いままでこそ一等史料のごとくに扱われているが、研究史を繙いてみると、当初『八幡愚童訓』についてはきわめて低い評価しかなされていなかつた。初期には「八幡靈験記ではあつても実録には非ず」と強調されていたのである。

大正二年（一九一三）に福岡日日新聞主催の「元寇史蹟現地講演会」が開催された。その記録が『元寇史蹟の新研究』（同四年・丸善刊）である。ここで九州帝國大学医学部教授、若き日の中山平次郎は『八幡愚童訓』が記述する矛盾を逐一、指摘した。中山平次郎は、のちに鴻臚館こうろかんの発見ほかで九州考古学に大きく貢献する人物である。発掘をせずに表面観察のみで立論した考古学者としても知られている。当時『歴史地理』『考古学雑誌』の常連投稿者だった<sup>〔2〕</sup>。かれはまず水城みずきの叙述の地理的、構造的な不正確さをついている。また『伏敵編』所収の『八幡愚童訓』「正応本」の矛盾を指摘し、その真正性を否定した。さらに「今は礎石ばかりになりにけり」とある記載からかなり後の作とし、『八幡愚童訓』は地理的に無知な京都周辺の人が後世になつて作成したものだとした。陸軍歩兵少佐であった竹内栄喜も、もし『八幡愚童訓』が記したように日本軍が水城（大宰府）まで総退却していたとするならば、翌日早

朝すぐに敵情の変化を察知したということとは矛盾しないか。そしてまもなくして志賀島に漂着する敵船を拿捕したという記述ともあわないのでないのではないか。そう疑問を提起している(二二二頁)。至極当然の疑問で、なぜ以後不間に付されたのか、ふしげである。さらに日清日露両戦争の経験をふまえつつ、一度の上陸は近代戦での敵攻撃のない状態でさえ、朝から夕方まで一万人が限度であり、三万からなる蒙古兵の場合、上陸にも乗船にも数日を要したはずだとしている(三三二頁)。当時の上陸用小艇は手こぎでの往復を強いられた。上陸時には日本軍は布陣して待ちかまえ、帰船時には後方から矢を射かけてくる。<sup>(8)</sup>時間も労力も相当にかかったであろう。竹内の指摘は無視できない。

八幡宮にとつては箱崎宮焼失という権威失墜はあつたが、わずかな損失を補つて十二分にあまりある僥倖だつた。八幡信仰の宣伝、神威の高揚のために絶好の機会であり、はやくから関係資料の収集が進められたことだろう。いやがおうにも八幡神は尊崇される。そうでなくとも、自ずと情報が集まってきた。石清水八幡宮のもとには多くの正確な記録が寄せられてきた。よつてその記述には一定の史実も含まれていよう。しかしそのことと叙述の内容がすべて実録というにたりうるのかは別問題で、『八幡愚童訓』執筆・叙述の意図をまずは確かめなければならない。

### 『八幡愚童訓』には次のような記述がある。

既ニ武力尽果テ、若干ノ大勢逃失ヌ、今ハ角ト見ヘシ時、夜中ニ白張袋束ノ三千(\*十)人計、笞  
崎ノ宮ヨリ出テ、箭鋒ヲ整テ射ケル——

日本ノ軍兵一騎ナリ共引ヘタリシカバ、大菩薩ノ御戦トハ不謂シテ、我レ高名シテ追帰シタリト申シナマシ。無ニ一人落失テ後、多ノ異賊怖恐テ逃シカバ、神軍ノ威勢嚴重ニシテ不思議<sup>いよぶよ</sup>弥<sup>ミ</sup>顕<sup>カク</sup>レ

日本の兵は戦わなかつた。みな逃げていなかつたなかを、唯一戦つたのは、夜中に白衣で出現した神仏、八幡大菩薩だけである。異賊は神との戦いに敗れたのだ。対馬の兵も壱岐の兵も無惨に全滅したこと、少弐の御曹司が名乗りを上げて嘲笑されたこと、日本兵が鉄砲に目が眩んで怖じたこと、などなども終始この文脈で構成されている。唯一八幡大菩薩の「御影向」たる鳩が旗の上に舞つた少弐景資は敵の大男を射た。のちに捕虜となつた蒙古兵に尋ね「大將軍流將公」とわかつた。「流將公」こそ「劉復亨」であるとして『八幡愚童訓』の史料的価値を高めるというが、そうした情報は確かに織り込まれている。しかしながら戦つたのは八幡大菩薩の化身たる「鳩」となつてゐる。菊池一三〇騎、佐間（詫摩）一〇〇騎、あわせて二三〇騎の場合も家子郎党は多く討たれたが、大菩薩を祈念した菊池二郎（武房）だけは生き残ることができて、城に戻り高名を得た（＊城とは先の「赤坂山」城・つまりのちの福岡城を指すのである）。関東から下賜された甲冑を、菊池はまつさきに当社八幡宮に奉納した。

こうしてみると『八幡愚童訓』だけが夜中の嵐にふれていない理由もよくわかる。兵が水城に引き上げたあと、夜中に白衣の神兵が矢を射かけて敵を逐つた。嵐が登場する必要はなかつたわけである。しかし嵐を八幡神に仮託したようにも思われる。「生虜シ日本人ノ帰ト、蒙古ノ生虜タルトガ一同ニ申セバ、更不可有疑」と叙述の裏付けにまでふれていますが、誰もいない場面での事件となる。誰もいなければ証人もいない。蒙古軍側の日本人捕虜や蒙古兵の捕虜たちが証言したことだとしている。ずいぶんな配慮だが、史実とは一致しない。

中山平次郎は『八幡愚童訓』について、「浅薄なる曲筆」（五一頁）、「頭脳を欠きたる記述」（一六四

貞)とした。そこまで酷評するのかとも思うが、気持ちはまことによく伝わる。声を出して『八幡愚童訓』をよむならば、みな同じ印象を持つだろう。「八幡靈験記ではあっても実録には非ず」とくり返して強調した中山らの主張は、正鵠を得たものである。高く評価し、継承したい。

すなわち『八幡愚童訓』にみる、状況に合致しない不自然な記述や、神のみが戦つたとする文脈における記述は、徹底して排除すべきである。その日のうちの大宰府・水木城(水城)までの退却などは認められないし、翌朝蒙古の姿がいっせいに消えていたという記述もまた、史実として認めるべきではない。

\*なお研究史に『八幡愚童訓』が幕府からの恩賞を得ることを目的に作成されたという論旨をみると(前掲『日本思想大系』あるいは平凡社世界大百科事典)、疑問である。恩賞は祈禱命令に対し出される。私戦が恩賞の対象とならないよう、『八幡愚童訓』の記す内容が直接恩賞の対象になると思われない。また再建に関しては、はやく文永十一年十二月二十一日に安芸、筑前両国が筥崎宮造営料国となっている(石清水文書・龜山院院宣)。ただちに朝廷は対応した。『愚童訓』作成が実利(恩賞)に直結しているようには思われない。ただし造営後三十年を経過して、修理助成の機運は醸成できた。

### 三 『勘仲記』が語る真の撤退日

かくしてわれわれは、文永の役を復原する作業から『八幡愚童訓』を排除することになった。そこでつぎにもう一つの史料、『勘仲記』(兼仲卿<sup>(9)</sup>暦記)を検討しよう。博多・京都と距離こそ離れていたが、同時進行・リアルタイムで綴られている。文永の役に関する唯一の同時代史料といえる(表1参照)。これまで言及されることはなかつたが、この日記記事の時間差こそが、事件推移の真相を語つている。

『勘仲記』十月二十二日条には「十三日」の対馬合戦の様子が伝えられたとある。

去十三日於<sup>ニ</sup>對馬島<sup>・</sup>筑紫<sup>・</sup><sub>少弐</sub>小卿<sup>・</sup>代官凶賊等合戦云々、依<sup>ニ</sup>此事資能法師<sup>少弐</sup>差遣飛脚於関東<sup>ニ</sup>云々、興

盛之沙汰驚遽無<sup>レ</sup>極者也

この日付は『高麗史節要』に記された壱岐到着の日十一日よりも遅くてあわない。『鎌倉年代記裏書』の「十月五日 蒙古寄來着對馬島」にもあわない。しかし博多にいた小弐（都督小卿）が、対馬での詳細を知るまでに数日を要したであろうことからすれば、博多発十三日の情報と見ることができる。よつて十三日発の早飛脚による情報を京都では二十二日以前に知ることができた。鎮西発鎌倉行の情報は、途次、京都・六波羅にもたらされ、それより朝廷に伝達された。『勘仲記』を記した広橋兼仲の場合、二十二日に知ったから、九ないし一〇日で知り得る立場にあった。

博多—京都間は鉄道時刻表によれば六六〇キロ強となつていて（新幹線も、在来線も同じ数字になつていてが、営業上の数値で在来線の距離である）。旧東海道五十三次百二十五里は東海道本線（在来線）五一三キロより短いとされている。<sup>(10)</sup> 鈴鹿峠経路と関ヶ原経路の距離差があるものか。当時の筑紫道も最短距離が選ばれていたはずである。六六〇キロにかなり近いと見よう。複数の人間（飛脚）が書状をもつて交代で引き継ぎながら、夜・昼歩く。すると一日で四キロ×二十四時間＝九六キロである。単純計算では徒歩のみで、休みなく引き継げば七日である。むろん関門海峡では潮待ち・風待ちがあつたし、大河川の渡河、また夜間の障害もあつただろうが、このような臨戦態勢下ではかなりの頻度で早飛脚が送られる。ロストタイムは最低限に抑えられた。平安期の飛駅が大宰府・平安京間で六～一二日を要したことからしても、京への使者は八日程度で到着し、広橋兼仲は九ないし一〇日で知り得たとみることができる。

のちには中納言になる広橋兼仲も、当時は中枢にいたとはいえない。文永十一年当時はまだ正五位下にすぎず、治部少輔(じぶのしょよ)だったようだ（『公卿補任』『尊卑分脈』）。しかし異国襲来がいかに大きな関心事であつたかは歴然としている。広橋・勘解由小路家は記録の家である。耳をそばだてていた彼の元に、情報はすみやかに届いたであろう。この場合兼仲は一〇日ほどで情報を入手できた。

つづいて十月二十九日条に「異国賊徒責來興盛之由風聞」とある。これが九日前、二十日の赤坂、鳥飼の合戦を意味していることはまちがいのことだ。みたとおり合戦の日付は『竹崎季長絵詞』にもあつて確実である。この場合も一〇日で情報を得ることができた。

つづいて十一月六日条。

晴、或人云、去比凶賊船数万艘浮ニ海上、而俄逆風吹來、吹ニ帰本国、少々船又馳ニ上陸上、仍大鞆式部大夫郎従等凶賊五十余人許令ニ虜掠(らりき)之、皆擄置彼輩等ニ召ニ具之、可レ令ニ参洛ニ云々、逆風事、神明之御加被歟、無レ止事可レ貴、其憑不レ少者也、近日内外法御祈、諸社奉幣連綿無ニ他事ニ云々

「ある人がいうには、逆風が吹いて、船は本国に帰った。残った船は大鞆式部大夫（大友頼泰）が捉えた」とある。みたとおり、いままで『八幡愚童訓』の記事と併せて、二十日合戦の翌朝、二十一日のできごと理解してきた。しかしこれが京都（広橋兼仲）に伝わったのは六日のことである。兼仲につても、また都人にとっても待望の朗報である。通常一〇日なのにこの事件のみが一六日もかかって伝わつたとすれば遅すぎる。「ある人がいうのを聞いたこと」と記してあるが、内容は詳しく噂話ではない。「或人ニ云」なる表現には、内裏・陣での公卿会議に出席した要人から、一早く特別に情報をもらつ

たというニュアンスを感じる。

ちなみに『勘仲記』に記されたこの間の京都の天気は、おおむね晴れで、「夜間降雨」、「陰時々雨」が二日ほどだけある。交通・通信に支障の出るほどの悪天ではない。また誤報であつてはならないから公表には慎重を期したこととも考えられよう。しかしその日のうちか、または翌日には続報・続々報が到着したであろう。京の人々が朗報を知つたのはそれほど後のことではなかろう。

すなわち六日の記事こそ、退却が二十一日よりも後だつたことを明白に示している。この年の十月は大で三十日までだから、逆算すれば十月二十七日頃のこととなる。赤坂の戦いから七日ほどが過ぎていた。

『関東評定伝』には「文永十一年十月五日、蒙古異賊寄来、着対馬島、討少弐入道覺恵代官藤馬充、同廿四日、寄来大宰府、与官軍合戦、異賊敗北」とある。対馬での合戦が五日にあり、少弐代官藤馬充が敗北し、二十四日には大宰府で合戦があつて、日本が勝利した。二十一日に元軍が帰国したわけではないことは明らかである。赤坂合戦のあと、三日おいて、侵攻してきた蒙古軍との大宰府合戦があつた（『鎌倉年代記裏書』に類似の記事があるが、不完全な写しで文意が通じにくい）。なお『吉統記』逸文（『伏敵編』所収）に「文永十一年十月廿七日（略）九国隕滅可憐、是関東政道之暖怠也、衆口囂々、但可秘云々」とある。これは十月二十日の戦闘結果を伝え聞いての記事である。吉統記の著者、当時蔵人であった吉田経長の場合は八日で九州の情報を見ることができた。

弘安二年十月八日関東下知状案（有浦文書・『鎌倉遺文』一八巻一三七三）や建治元年十月二十九日將軍家政所下文（松浦山代文書・『鎌倉遺文』一六巻一二〇七七）によれば、「文永蒙古人合戦」において佐志房とその嫡男直、二男留、三男勇あるいは山代譜が命を落としている。前者の場合は全滅である。断片的な史料からも悲惨な戦況が推測できる。二十日の合戦では蒙古は副将が負傷し、赤坂山を落とせずに龜原そばら

山に上がっている。日本軍がそれほどの劣勢だったとは考えられない。佐志一族の敗死は別の日の合戦ではなかろうか。松浦党であるから二十日以前に合戦をして敗れたことも考えられなくはないが、二十日以後に戦いがあつたことも考え得る。

さて六日の記事には「逆風」のことが記されている。これまで『高麗史節要』の記事によつて、風は「会夜」、二十日の夜に吹いたとしてきた。しかしそれにしては京都への伝達が遅いのではないか。  
冒頭に述べたが、『高麗史節要』の編纂は一四五二年である。事件が起きてから一八〇年を経過している。一等史料として対等の価値を置くにはいささか苦しいところもある。本当は、風はいつ吹いたのか。

再度『勘仲記』を見よう。当日十月二十日、京都の天気は晴で、「朝霜太」とある。霜が降りるのは気温摂氏四度以下になつたときからで、現在の京都十一月下旬の平均最低気温は四・九度である。「太」(はなはだし)とあるように、著しく冷え込んだ。これは高気圧の到来で放射冷却が起きたことを意味してはいないだろうか。こうした快晴天は、一日程度は持続するという。天気は安定していたのである。西日本（京都）には高気圧があつた。博多・京都間の距離があるとはいえ、その夜に寒冷前線が北部九州を通過する確率は低いのではないか。

もし極端に発達した低気圧の通過があつたのなら、西日本・京都にもかならず影響がある。『勘仲記』は天気についても詳しく記している（「十八日、晴、風烈」など）。この間、なにも書かれていないことも不自然な感がある。二十二日は前夜から雨だつた（「自レ夜雨降」「已剋以後雨脚漸休、天顏猶陰（略）甚雨不レ休」）。しかしこの雨が二十日夜の嵐の影響を受けているとすると、遅すぎよう。

『勘仲記』の天気記載から嵐についての情報を得ることはただちにはむずかしそうだ。だが少なくとも二十日夜の嵐の実在を積極的に証明する記述はないとはいえる（以上については福岡管区気象台・宇宿輝雄、重岡博明両氏のご教示を得た）。『高麗史節要』が記した嵐、『勘仲記』に記された「逆風」は二十日以降である可能性も高いことを指摘しておきたい。

箱崎の炎上による廢朝（政務の休業）記事は十四日である（同じ記事がいつたん十二日条裏に書かれているが、抹消されている<sup>[1]</sup>）。一連の記事のなかで箱崎炎上がもつとも遅い。この記事は炎上後約十日間の早飛脚と陣定の決定までの日数を経て、実行の日に記された。はたしていつ箱崎は炎上したのか。

『季長絵詞』では箱崎宮鳥居の前を通過する季長一行には軍事的緊張が感じられず、背後に炎上があつたとは想定しにくい。このときはまだ箱崎炎上はない。その日の主戦場は西方、赤坂鳥飼で、蒙古側が副将まで重傷を負つたという情勢からすれば、夜まで含めても十月二十日の炎上は考えにくい。あるいは上記の二十四日の合戦であろうか。退却する際に自身が有利に安全に逃れるため、敵方に放火し攪乱する戦法は一般的なものである。そのために箱崎宮が焼かれたとみるならば、退却の日か前夜（二十六、七日頃）となろう。

『八幡愚童訓』は箱崎宮炎上を明確には記さないが、

逃ツル方ヲ顧レバ、在々所々猛火唱立シク燃上シカバ、是偏敵ノ態ト覧テ怖ク

と炎上の事実を認めてはいる。廢朝するほどの重大事件だから、隠せなかつた。しかし『愚童訓』がいふように、最初の戦いで焼かれたわけではない。『絵詞』から推測できるように、二十日の箱崎炎上は考えにくい。しかし事実のままに記せば、神が戦ったあと、最後に社が焼かれたことになる。これでは

神が勝利を導いたことにはなりにくい。順序は逆に記された。

『八幡愚童訓』は作り話ばかりではない。事実が多く盛り込まれてはいる。事実を含めば説得力をもつた。一〇〇パーセントのウソはない。そのようなウソはだれも信じない。『八幡愚童訓』は事実をおりこむ創作ドラマである。ドラマは戦いの翌朝にもつとも劇的に盛り上がる。その設定が「静まりかえった博多湾、朝の光景」だった。

以上『八幡愚童訓』を排除した上で、『勘仲記』の蒙古関係伝聞記事が、事件の起きた時間差、経過の推移に対応していると考えて、文永の役を復原してみた。ふつうならば日記を読む際にはだれしもう考えて史料操作する。しかしこまでの研究はそうした視点に立ちえなかつた。『八幡愚童訓』の史料的価値を無批判に復活させた段階で、研究者もまたそのマインドコントロール下に入った。研究史全体が一種の共同幻想にあつたといわざるをえない。

ただしそうなる原因・背景がもうひとつ考えられた。さきの十月二十九日条には引用記事に続いて、

「関東」武家辺騒動云々、或説云北条六郎并式部大夫時輔打上云々、是非未<sup>レ</sup>決、怖畏無<sup>レ</sup>極者也  
とある。大正十四年（一九二五）の八代国治『国史叢説』以来、これは蒙古合戦対応策に関する関東・  
鎌倉発の情報で、北条氏一門の九州派遣であるとされてきた。しかしそれでは時間の動きが整合しない。  
日記は記主のいた京都の視点で書かれている。京都の貴族が「関東武家」といった場合は鎌倉だけでは  
なく、六波羅も含む表現であろう（『関東』の部分は右行間への追筆である）。「或説云」は赤坂合戦とは別の  
情報である。式部大夫時輔らが「打ち上る」とあるけれど、北条時輔（時宗庶兄）は二年前の文永九年  
(一二七二)二月騒動に誅されている。『保曆問記』に「遁テ吉野ノ奥ヘ立入テ行方不知」、野津本「北

条系図（『国立歴史民俗博物館研究報告』5、田中稔氏紹介）に「文永九年二月十五日有レ事被レ誅畢、  
但戸津河城現在云々」とある記事をあわせ考えれば、都人は彼の健在を信じていたと思われる。

時輔父子を核とする反時宗グループの動きはこの間、止まなかつた。十数年後の弘安七年（一二八四）にも「式部大夫殿同御子息」の「諸処経廻」を警戒する幕府の指令が出されている（鰐淵寺文書・同年九月七日佐々木頼泰施行状、『鎌倉遺文』二〇巻一五三〇〇）。反時宗グループを頼つて行動をつづけたその男子は、のち正応三年（一二九〇）、庇護を求めた三浦介入道のもとで捕縛され、処刑された。<sup>〔12〕</sup>

北条六郎はこれまでの定説では時定だつた。時定はのち鎮西に下向し、弘安三年（一二八〇）から四年までの間に肥前守護に着任した。だが六郎を時定とみると、時輔との関係が全くわからない。京都にいる兼仲が書いた「打ち上る」という表現が九州への下向を指すとは思われない。「京へうちのぼる」という意味以外にはないだろう。実は二月騒動の関係者に「北条六郎」が複数いる。まず正宗寺本・北条系図（東京大学史料編纂所「諸家系図」による）では、討たれた北条教時子に六郎宗教がいる。ただし教時は三八歳で死んだのだから、その子とすれば、二五歳であつた時輔よりも若年となる。その場合、まず六郎の名をあげ、ついで時輔を記す『勘仲記』の記述の仕方がやや不自然となる。いっぽう『系図纂要』をみると、北条教時自身が「六郎」と記されている。かれは北条朝時の六男であるから、たしかに周囲から「六郎」と呼ばれていただろう。『吾妻鏡』でも建長年間（一二四九～五六）まで「遠江六郎」とされている。その子宗教が長子であつたにもかかわらず、六郎とされたことは、周知されていた父の呼称を継承したものかと思われる。六郎は教時と考えたい。すると二月騒動の中心人物、教時・時輔の二名はともに生きていると京都の貴族ら、そして庶民に思われていたようだ。そして背景には実際に残

党の活動が顕著にあつたものと思われる。

蒙古襲来という混乱に乗じて、かれら反時宗グループが蜂起することは十分に想定されることであつた。すなわちこの記事は蒙古合戦への布陣強化とは無関係で、逆に蒙古合戦による朝廷と幕府の混乱を示すものである。「是非未決、怖畏無極者也」とあるが「怖畏」は蒙古へだけのものではない。二年前の敗者たちが未だに逃亡するのみならず、反撃をも策動することに、貴族たちはおびえたのである。

なお当該記事中「時輔」の文字はなぜか八代国治前掲著書では読まられておらず、式部大夫も別人（北条時広）に比定されていた。『勘仲記』は戦前には岩崎文庫の奥深くにあつて、ふつうの研究者ではみることができなかつた。東京大学史料編纂所にあつた写本によつて、『史料大成』（昭和一〇、一九三五）として刊行されたものの、この文永十一年条は東大本には写し漏れとなつており、のぞかれていた。<sup>13)</sup>龍  
肅すずむ『蒙古襲来』（一九五九）の段階で、「時輔」は正しく読まれてゐるが、それでもかれは時広とされてゐる。時輔と明記されているのに、なぜ時広になるのか。はなはだ疑問である。時広は寛元三年（一二四五）に式部少丞ではあつたが、宝治元年（一二四七）武藏権守、正嘉二年（一二五八）越前守だから、この段階では「式部大夫」とは呼ばれまい。

なお広橋家史料は近年、国立歴史民俗博物館所蔵となつた。高橋秀樹氏によつて、その研究報告（七〇、平成九）に文永十一年条の翻刻がなされた。その段階ではじめて全貌が明らかになつたわけで、長らく不運な史料だつたことになる。

## 四 むすび——文永の役の位置

赤坂鳥飼の合戦をへて膠着があつた。<sup>(14)</sup> 対峙期間があつた。いくつかの小競り合いもあつたし、死者が出る合戦もあつた。蒙古の騎馬戦術に日本軍は苦戦を強いられていた。そういう緊張のさなかのある夜に、嵐が吹いた。時間切れを悟つた蒙古軍は風待ち・潮待ちののち、博多湾から立ち去つた。積極的ではないにせよ、予測範囲内での自主的撤退だつた。箱崎に放火するだけの軍事的優位は確保していた。

### 俄逆風吹来、吹き帰本国

『勘仲記』にみる情報の伝わり方からすると、決定的であつたのは彼らが姿を消した瞬間である。嵐そのものによる敵船被害の記述はない。『勘仲記』には数万艘、「高麗史節要」には九〇〇艘と記された蒙古の戦艦は、嵐による被害を受けたにちがいないが、一目瞭然というほどには可視的で極端な被害ではなかつた。弘安の風とは異なつていた。

文永の役に関する史料は少ない。これまでに相互の史料に記述が欠ける部分を、他の史料が補完する形で「史実」を復原してきた。いつたんは排除されたかにみえた『八幡愚童訓』もいつしか一等史料になつた。史料への偏愛を感じる。『八幡愚童訓』に慎重だつた歴史家も、他の記録に合致するかにみえる箇所については、『八幡愚童訓』にあわせて他の史料を解釈した。これは危険な史料操作であつた。『八幡愚童訓』を排除し、『勘仲記』のような一次史料が独自に語ることから史実を復原する。そこにこそはじめて真実の歴史がみえてくる。

中山平次郎らの見解は中央・官学アカデミズムによつて黙殺された結果になつた。いま彼らの著述を

引用する研究者はいない。だが九十年を隔てて聞く彼らの主張はあまりに新鮮ではないか。中山平次郎・竹内栄喜らの原点・地平に立ち戻れ。筆者はそう主張したい。

蒙古高麗軍は十月初頭に合浦を出発した。高麗元宗の死去・葬儀、また軍船建造の遅れがあつたにせよ、他国への遠征としてはいくらか展望を欠いた行動だつた。四万という数字も、のち弘安の役の十四万人に比べれば、たしかに少なかつた。早期の撤退は出発時点で宿命づけられていた。

蒙古・高麗は、日本人の意識に十分なだけの打撃を与えるべく、帰途についても差し支えなかつた。冬の嵐はタイムリミットを示した。すでに季節は安全な帰国を至上課題とするまでに至つていた。翌文永十二年（建治元年、一二七五）春には、はやくも元使・杜世忠が長門に到着する。元（蒙古）にとつてはむろん予定の行動である。前年の攻撃はそのための第一弾であつた。

#### 注

- (1) 『お天気日本史』昭和四五（一九七〇）、初出は「文永の役の終わりを告げたのは台風ではない」『日本歴史』一二〇・昭和三三、「文永の役の終末について諸家の批判に答う」『同』一四五・昭和三五。荒川の報告は衝擊的で、彼は時の人となつてラジオ放送にも出演して影響を与えたといふ。
- (2) 綱野善彦『蒙古襲来』一九七四、川添昭一「異國合戦」『日蓮と鎌倉文化』（一九八〇）二、初出は『日蓮、その思想・行動と蒙古襲来』一九七一、瀬野精一郎「神風余話」（『日本の中世』月報一〇、平成一五・一九八〇三）などは自主撤去説に近い。荒川説を批判するものとしては龍齋『蒙古襲来』（増補版、昭和四一）。
- (3) 石井進『鎌倉びとの声を聞く』（一九八〇）に引用のワルシャワ大学スワポニル・シユルツ氏の見解、杉山明「モンゴル時代のアフロ・ユーラシアと日本」（近藤成一編『モンゴルの襲来』一九八〇三・所収）。
- (4) 『中国・朝鮮の史籍における日本史料集成』三国高麗之部・所収。

(5) 志賀島につながる海の中道なども博多に近接する長浜だつたが、ここには築かれていない。博多から北東にあり、上陸する可能性が低かつた。砂嘴でもあつたから、仮に上陸があつても、別位置での防禦が考えられる。

(6) 中世博多津は石堂川（御笠川）・那珂川が合流した河口にあつた（旧樋井川も同一河口であつたかどうかまでは、わからない）。福岡市作成2500分1図等高線から確認できるよう、今日の石堂川流路は海岸砂丘の南側、後背低地から海側（北側）・砂丘微高地に向かつて流れしており、あきらかに自然河川のままの流路ではない。やはり内海潟湖が形成され、両川は一つになつて河口を共有していた。潟湖の痕跡は石堂川分水開口後もバックマーシュとして残り、そこに「房州堀」が掘削された（図6）。平成11年6月29日「福岡水害」および平成15年7月18日豪雨で石堂川（御笠川）堤防破堤により浸水被害を受けた地域は、旧石堂川が形成していた後背湿地域に一致する。なお微地形については「福岡平野の古環境と遺跡立地」（一九九八）に言及があり、参考になる。ただし掲載地図の等高線に不自然なものがあり、修正した（一二〇一三頁、図3参照）。「筑前国統風土記」博多石堂に関係記事がある。

(7) 中山の業績については梅原末治「中山平次郎博士」「同年譜」「同著作目録」「古代学」8増刊、中山平次郎博士追憶号、一九五九）、岡崎敬「中山平次郎集」日本考古学選集一二、一九八五、小田富士雄「研究者列伝2中山平次郎論」（弥生文化の研究）10研究の歩み、一九八八年、雄山閣出版刊）、木村幾多郎「中山平次郎論」（繩文文化の研究）10繩文時代研究史、一九八四年、雄山閣出版刊）。

(8) のち竹内は『元寇の研究』（雄山閣・昭和六）を出版したが、巻頭言を池内宏が執筆している。『八幡愚童訓』への批判は大きくて一トーンダウンした。

(9) 高橋秀樹「広橋家旧蔵「兼仲卿曆記 文永十一年」について」（国立歴史民俗博物館研究報告）七〇、平成九）による。

(10) 豊田武・児玉幸多編「交通史」昭和四五、青木和夫「日本律令国家論攷」平成四、刀伊入寇時には十一日を要した（小右記）寛仁三年四月十七日条）。なお早飛脚のほか、早馬も送られた。ただし馬は全速力で走りうる時間が限られており、要した日数にあまり差はないかのように考えている。

(11) 「帝王編年記」は廃朝がこの日十四日の陣定で決まつたと記述するが、決定は実行当日よりは前でなければなら

ない。ほか『帝王編年記』が十一月六日に記した内容は、『勘仲記』と『八幡愚童訓』の合成のようであり、明らかに後者の影響を受けている。『帝王編年記』は後光厳天皇の時期・南北朝初期の作（『国史大辞典』）。

（12）『鎌倉年代記』（『北条九代記』）、佐藤進一『鎌倉幕府守護制度の研究』昭和二三、出雲・越前の項。

注（9）参照。

（13）（12）都甲文書・文永十一年十二月七日大友頼泰覆勘状写（『鎌倉遺文』一五巻一一七七一）も「鳥飼浜陣」について記している。異例に早い軍忠・安堵だが、写である。守護大友頼泰がこのような内容を「仍執達如件」と奉書形式でだすのは不自然で、後世のものであろう。